

井上靖文学における僧侶像

―「僧行賀の涙」から『天平の薨』へ―

李 鉦

井上靖の長編小説『天平の薨』は、『中央公論』昭和三二（一九五七）年三月から八月にかけて連載された。同年一二月、中央公論社より単行本として刊行された。翌年二月、芸術選奨文部大臣賞を受賞した。昭和三八年四月、中国語訳の『天平の薨』が作家出版社より刊行された。中国の伝統的な文化を舞台とした小説として広く読まれている。

福田宏年は、この小説を井上靖の「本格的な歴史小説の第一作」⁽¹⁾と指摘している。また、蒲生芳郎は、『天平の薨』の作者の創作態度について、「史実に対する恭謙な感情、史料を使うよりは史料に仕えるとも言うべき作者の姿」⁽²⁾と述べている。

渡唐した学問僧、留学僧の話は『天平の薨』に先立ち、既に短編小説「僧行賀の涙」という作品で語られている。しかし、前作「僧行賀の涙」は発表当初さほど評価されることはなかったが、『天平の薨』発表の三年後、一気に注目を浴びることになる。山本健吉がこの短編小説を『天平の薨』の「雛型」⁽³⁾と位置づけたのである。山本健吉は以下のように述べている。

かくして行賀は、ある意味では『天平の薨』の業行あるいは景雲の前身であり、また他の意味では普照の前身でもある。

同じく仙雲は、『天平の薨』の戒融の性格を、相当強く分ち持っている。だからこの作品は、『天平の薨』の雛型だったとも言えよう。

Abstract

Inoue Yasushi published the novel "The roof tile of Tempyō" in 1957. This novel earned the Award of the Minister of Education for Fine Arts the year after it was published. While "The roof tile of Tempyō" was drawing public interest, Inoue's early short story also based on the Envoys dispatched to the Tang Dynasty, named "Tears of monk Gyōga", also started drawing public attention. Some experts consider "Tears of monk Gyōga" as the foundation of "The roof tile of Tempyō". In this paper, the focus is on the comparison of the images of the monk Gyōga, the monk Gyōkō and the monk Fushō and analyses their relationship by comparing them to articles.

キーワード……遣唐使 僧侶像 写経 自己完成 涙

一、はつめじ

このような評価は今でも定説となっている。神奈川近代文学館所蔵「井上靖文庫」に井上靖の創作メモが残されている。本稿末尾に掲げた資料①「天平の薨」関連「メモ」(4)によると、井上靖は「自己完成」というキーワードを前作小説の主人公行賀に当てている。この点について、二つのことが考えられる。「自己完成」は『天平の薨』の普照の人物像に関わるキーワードでもある。行賀と普照の二人の間には何らかの繋がりがあるのではないだろうか。もう一つは、普照の人物像を描いた時、「僧行賀の涙」の行賀のことを参考にしたことである。

本稿では、井上靖の創作メモならびに、先行研究で言及された典拠と作品とを対照しながら、作中人物の僧侶像を考察する。その際、メモ、典拠と作品との相違点の背景、小説のモチーフを分析していきたい。また、作者自身の生活の中に、行賀、業行、普照の原型を探してみたい。

二、創作メモから見る行賀像

井上靖は歴史小説を創作する際、まず大量の史料を収集することから始める。井上靖は、以下のように述べている(5)。

私は歴史小説を書いておりますが、史料というものを使わないと歴史小説は書けません。ただその史料も一等史料、二等史料、三等史料というものがあまして、できるだけ信用

できる史料を取り扱って小説を書かなければならぬわけですが、厳密に言いますと、一等史料というものは、非常に少ないのではないかと思います。

井上靖は大量の史料を選別した上で、「一等史料」を精選する。その「信用できる史料」は、その後小説を創作する際の大筋となる。史料を活用し、作者の想像力を加えていくことで人物像は生き生きと描かれることになる。

では、「僧行賀の涙」の場合、井上靖はどのような史料をどのように活用しているのだろうか。

以下、行賀の典拠に関わる資料である【附録1】の創作メモを参照してみよう。

資料②②のメモによると、①の行賀法師に関連する史料は、黒板勝美編『日本高僧伝要文抄 元亨釈書』、『新訂増補 國史大系』第三一巻、昭和五年七月五日、吉川弘文館)中の「元亨釈書卷第十六」(二三三頁〜二三四頁)である。また、③及び④の慧濟法師、僧旻法師、慧隱法師、智通法師の部分は、同じく「元亨釈書卷第十六」(二三二頁)の項目から簡略に写したものである。③梵釈寺永忠の部分は、二三四頁の項目から書き写したものである。③と④において法師の順番は「元亨釈書 目録」による。②にこの書物の出版年月が「八月」とあるが、実際の『日本高僧伝要文抄 元亨釈書』の出版月は昭和五年七月五日であるため、これは誤記と考えられる。

資料3②のメモは下中弥三郎編『新撰大人名辞典』（昭和一二二年月二三日、平凡社）の「行賀」の項目を書き写したものである。井上靖はこの二つのメモの史料を参照した上で、「僧行賀の涙」を執筆したのである。

さらに、これら以外に井上靖が参照した史料として、山田哲久は、以下のものを指摘している⁶⁾。黒板勝美編『類聚国史後編』（『新訂増補國史大系』第六卷、昭和九年一月、吉川弘文館）、辻善之助『増訂海外交通史話』（昭和五年五月、内外書籍）、木宮泰彦『日支交通史』上巻（大正一五年九月、金刺芳流堂）。確かに、以上の三冊の文献と、小説の内容との対応度は高い。山田の論考の確実性は高いと考えられる。

最後に、作品本文との比較を行いたい。小説中の「行賀」と史料とで一致している点は、出身地、宗派、入唐開始の時期などである。特に、明一の責問や、「長途一躡 何妨千里之行」などは小説と史料とで同じである。大きく異なる点は、「在唐七年」が、小説では「在唐三十一年」になった点である。その変更の根拠として考えられるのは、資料3①の「(他説に三十一年)」という記述である。

黒板勝美編『日本高僧伝要文抄 元亨積書』には「在唐七年」とあるが、『本朝高僧伝』に留学「三十一年」とあり、ほかの史料『七大寺年表』⁷⁾において少僧都となる年月を推測すると七年であることが分かる。しかし、七年の留学生活を経ただけで、母国語を忘れるというのは不自然だろう。そのため、明一の試問にすぐ

に答えられなかったのは、在唐三十一年という長期間にわたり母国語を使用しなかったためと井上靖が判断したからではないだろうか。

以上に挙げた史料変更の箇所だけではなく、ほかにも「僧行賀の涙」には変更部分がある。そのうちでも、行賀が「写経に没頭」している姿が特に印象深い。この点について、以下では『天平の覺』において業行、普照が写経をする姿と関連づけて考察するとしよう。

三、写経の姿―行賀、普照、業行

「僧行賀の涙」の主人公行賀は史上実在した僧侶である。『天平の覺』の普照も、実在人物である。それに対して、「業行」の名も、確かに、史料に記されている。『続日本紀 後篇』巻二十四⁸⁾に、「留学僧榮叡業行等白和上曰。仏法東流至於本国」(「留学の僧榮叡・業行等和白して曰はく、仏法東流して本国に至る」⁹⁾)とある。しかし、『続日本紀 後篇』の注によれば、「業行」とは「普照」と同一人物であるという。また、「業行」という名は、『唐大和上東征伝』、『元亨積書』でも「普照」のことを指している。それ以外の史料文献では、「業行」は「普照」と関係なく、別に実在した僧侶として見出すことができない。このことから、「業行」という名は史料に記録はされているが、普照とは別に実在した人物かどうかは不確かである。井上靖はその史料の不明点を利用し、

業行の人物像を虚構したと考えられる。なぜ虚構人物・業行を創作したのか。本節では、行賀と普照、行賀と業行、それぞれを比較して分析する。

・行賀と業行

「僧行賀の涙」において行賀は第十回目の遣唐使の一人に加わり、留学僧として唐土へ派遣される。在唐三十一年間、経典を写す仕事に没頭した。半生をかけて手写した経巻類を日本に持ち帰ったが、長く在唐していたために日本語を自由に使うことができず、試問役明一の質問に答えられなかった。行賀の眼から涙が溢れ、「学殖膚浅」との悪名声を受けた。帰国後の行賀は、自分の気持ちを誰にも伝えられず、「一般には否定的な言辞が弄された」。彼は興福寺の一室に閉じこもったまま、人と会わず、写経する。以上に、井上靖が小説に描いた行賀の話は史料にも記されているが、本当に母国の言葉を忘れたのか、現在のところまで、究明されていない。例えば、菊池寛は「遣唐船物語」の「遣唐大使の航行難及挿話」⁽¹⁰⁾に於いて、以下のように書いている。

留学生達の間でも相当面白い話が残されてゐる。清河等と同じ頃入唐した僧行賀は、在唐三十一年にも及び、帰朝して朝廷より厚い待遇を受け多数の学僧を教へてゐた。所が東大寺の僧明一が行賀を碩学の僧と見て、宗義の事で試問に行つ

た。すると行賀は塞つてしまつて何も云ふ事が出来なかつた。明一は憤つて「貴様は日本と唐土の両国の飯を食ひながらなんと云ふ浅学なのだ。まるで小僧の様ぢやないか」と罵つた。行賀は愧ぢて涙をぼろ／＼とこぼした。

井上靖は、「菊池ファン」として彼の作品を「一応一篇残らず読んでいた」⁽¹¹⁾と語っている。井上靖が「僧行賀の涙」を創作する前に、菊池寛の「遣唐船物語」を読んでいたのか、そこから僧行賀の物語を知り、それを小説にしたのか、この点に関してはまだ研究の余地がある。

また、終盤部分では、明一の責問に対して、行賀は「長い歲月の霧のような妙に空漠とした感慨」を抱いたという。その時、行賀は「仲麻呂と清河」、「仙雲のこと」を思い出し、行賀の目から涙が「滂沱」として流れ落ちた。作品の標題の「涙」は、まさにこの涙を示している。この涙は誰にも理解されない気持ち、現実への無力感、「空漠とした感慨」をも含むだろう。

井上靖の小説中、行賀に関する評価は明確に書かれていないが、「行賀は、興福寺の別当となり、延暦二十二年七十五歳で寂した」と語られている。井上靖は大量な史料からその点を選び、小説の最後に加えている。行賀を肯定的に評価しているであろう。

「写経」が仏教を弘めるために重要なもの言うまでもない。井上靖は『天平の薨』において、一生をかけて「写経」に没頭した僧侶業行を描いた。前作の主人公行賀と比べ、業行が写した経典

は珍しいものが多く、経巻類の数は多く、業行は字体までも原文と同じように書き写している。「一字の間違いもなく写されたもの」を日本に持ち帰るのが業行の夢であった。

『天平の薨』の中で、業行は無名な写経僧の代表として、他人と交流せず、ひたすら経文を写している人物設定がなされている。その生き方が、業行の終盤の悲しい運命の伏線となっていると同時に、僧侶像を鮮明に浮き彫りにしている。なぜ業行は無事に経巻を日本に持ち帰れなかったのだろうか。もしその写した夥しい経巻を日本へ持ち帰ることができたのであれば、仏教界にどのような衝撃を与えたのだろうか。一連の疑問を残し、読者の想像力を掻き立てる。

本稿末尾【附録2】の資料4に、作品に描かれる行賀、普照、業行三人の写経の姿を抜き書きした。これらを見ると、三人とも「机に向かい続け」、「机から離れない」ほど「写経に没頭」し、仏教知識を勉強する僧侶として描かれていることがわかる。特に、行賀は「老けてい」て、「猫背」、「強度の近視」とされ、業行もまた、「老けて見えて」、「貧相な背後姿」とされ、二人の姿には似た点が多い。やはり、行賀は業行の前身なのではないだろうか。

・行賀と普照

本稿の冒頭で述べたように、『天平の薨』のメモによると、井上靖は普照の人物像を描いた時、行賀のことを参考にしたと考えら

れる。

普照に関わる主な典拠は、『唐大和上東征伝』(12)である。典拠における普照の僧侶像と『天平の薨』における普照の僧侶像とを比較するため、中村詳一の訳から普照一人(栄叡、普照を除き)が登場している場面を【附録2】の資料5に挙げる(計七例)。

中村訳を見ると、栄叡、普照二人が同時に記述されているのは十二箇所、普照は七箇所、栄叡は十箇所である。さらに、玄朗は三箇所である。普照は『唐大和上東征伝』において主な登場人物であるが、彼に関する記述は多くない。普照が「写経」する姿も見当たらない。しかし、『天平の薨』においては、「一日中机から離れない」普照の様子が何箇所も描かれている。

また、本来「自己完成」を志としていた普照は、渡日計画に従い、その志を変えて行く。高木伸幸⁽¹³⁾は「学問」と「冒険」の二つの方面から小説を解説している。高木は、「普照は自己を放棄したと捉えるよりも、むしろ「学問」に対する姿勢を成長させた」と論じている。小田島本有⁽¹⁴⁾は、普照が「自己本位型の人間」から「献身型の人間」になったとし、栄叡、鑒真、業行の三人が普照に影響を与えたという。

小説の冒頭部分で、「秀才」と言われた普照は、「自分はただ殆ど一日中机から離れないでいるだけだと思っただ」とされている。その後、業行と約束した通り、普照は朝から晩まで写経している。その写経の姿は、普照と業行とで似ている。資料4を参照すると、経典を写す様子については、普照と業行とで似ているだけでなく、

行賀とも類似している。三人はいずれも、「写経に没頭」、「机に向かう」、「明けても暮れても写経」などといった同じ表現で描写されている。

当初、普照が志とした「自己完成」は、小説中で明確には書かれていない。【附録1】の【資料1】によれば、井上靖は、「僧行賀の涙」の行賀についても、「自己完成」という問題を構想していた。ここで、留意しなければならないのは、誰が、何を「完成」したいと考えているのかという点である。まず、行賀の入唐当初の目的は「唯識、法華両宗を学び」たいということであった。彼は目的を実現するために、在唐三十一年一人で写経し、帰国後も「人と会わず」経巻を写している。行賀は入唐した目的を「完成」したといえる。では、『天平の甕』において普照が入唐した目的は何であろうか。『天平の甕』では、遣唐使を派遣する主な目的は、伝戒の師を招請することにある。その任務は一人では「完成」できない。五人の留学僧の中で、結局普照のみ鑿真に従い日本に帰る。普照の入唐の目的も「完成」した。単なる入唐当初の目的から見ると、行賀と普照は共通している。短編小説「僧行賀の涙」において行賀の僧侶像は、完全に展開されなかった。行賀一人は、『天平の甕』で普照、業行に分け、描写されている。言い換えれば、普照と業行の原型は行賀であろうと考える。業行は入唐当初、「自分で勉強しようと思って何年か潰してしまったのが失敗でした」と言う。そのため、業行は知識の運搬者として、数十年の在唐生活の間、写経に没頭したのである。行賀が経巻類の運搬者の姿は、

業行の僧侶像と重なっている。

業行とは異なり、普照は最初の目的通り専ら律部の勉強に明け暮れるが、渡日計画を進めるに従って、「自己」の知識の「完成」を断念し、戒師を招くという重任を担うようになって行く。

行賀、普照、業行三人の中で、業行一人は夥しい経文とともに海底に沈んでしまった。行賀と普照は、入唐当初の目的を完成したという点で類似している。行賀が一生勉強と写経に専念する姿は、普照の前期の姿と重なっている。

井上靖は歴史上に代表性がある留学僧の運命を描くことを通して、文化移入の問題を表現しようとした。井上は「天平の甕」の登場人物（15）で、以下のように述べている。

こうしたいろいろな運命を持った若い留学生、留学僧の犠牲の上に、天平の輝かしい大陸からの文化移入は為されたのである。これが小説『天平の甕』の主題であるが、果してそうした作者の意図が出ているかどうか。

遣唐使とは、莫大な費用をかけ、多くの人命の危険を顧みず、先進国の「文化」を日本に「移入」する目的を持っていた。

『天平の甕』は普照の視点で、高僧鑿真一行が渡日する経緯を描いている。前後十二年間、六回渡日を企て、ついに普照は鑿真と共に日本に到着する。その間、普照は変化する。伝戒師を招請するために、独学から離れ、鑿真から改めて仏教知識を勉強する。

普照一人には、中国に渡ったほかの四人の僧侶の特質が集約されている。

普照は最初から栄叡と共に戒師を招き、業行のために一生懸命写経し、戒融から「托鉢」式の学び方を知り、玄朗の還俗も理解できる僧侶である。普照のような、状況に応じ、「机に向い」ながら、知識を活用できる「学問僧」こそ「文化移入」の鍵ではないかと考えられる。

そこから、遣唐使を題材とする短編小説「僧行賀の涙」の「主題」も窺えるだろう。行賀のような、一生を仏法興隆に捧げたにもかかわらず、自分の業績を否定された留学僧は数多くいたに違いない。「天平の輝かしい大陸からの文化移入」の背後には、行賀のような留学僧の「涙」が隠れているだろう。

四、行賀、普照、業行の原型（モデル）

前章では、没頭する三人の僧侶像を分析した。行賀、普照、業行は三人とも写経という自分の仕事や関心に没頭している僧侶である。井上靖の実生活の中で、このような人物は存在したのだろうか。作中人物のモデルはいたのだろうか。以下では、この問題について、分析をしてみる。

井上靖は『私の自己形成史』の「人生の目覚めに導いたもの（16）」という一文の中で、以下のように書いている。

私は今日、学者や芸術家の仕事を考えるとき、彼等二人（論者注―荒井寛方と足立文太郎）の顔を思い浮かべることなしに考えることはできない。

自分に大きな影響を与えた人物として、井上は岳父であり解剖学者でもあった足立文太郎と、さらにもう一人、荒井寛方画伯の名を挙げている。文太郎は、一生を動脈及び静脈系統の研究に捧げた、世界的な解剖学者である。もう一人の荒井寛方は、壁画模写に没頭した人物であり、行賀、普照、業行に似ている。

昭和一五年、大阪毎日新聞社に勤めていた井上靖は壁画模写の記事を書くために、足しげく法隆寺に通った。荒井寛方は他の画家たちと違い、「そこへ行くと、荒井寛方は何でも私には話してくれた。質問に対しては、いつも気軽に答えた」（17）。そのため、模写陣の中で、井上靖は荒井寛方画伯と親しくなったのである。

また、井上靖は『私の自己形成史』の文中で、荒井寛方の模写の姿を次のように描写している（18）。

氏は老体にもかかわらず、はたで見てもわかる不自由な日常生活をしながら、毎日のように火の気のない金堂にかよっては、模写のために作ったやぐらの上に座り込んで、多くして報いられることの全くない模写という仕事に、ほとんど無報酬で没入していた。

荒井画伯の模写の姿は【附録2】の資料4「写経の姿」と重なっている。荒井画伯と僧侶たちの専門分野は違い、生きていた年代も違うが、彼らの「写経」、「壁画」模写に対する姿勢は類似している。彼らはできる限り原本に忠実に「写し」ている。

また、荒井の「模写」の姿について、井上は以下のように、「法隆寺ノート」（19）に詳しく記している。

金堂の荒井班の仕事を訪ねた。氏は十号大壁の前に、背をまるめた前屈みの姿勢で坐り、模写の筆を執っていた。氏は壁画の表面に出ている色を塗らず、その原画ができた順序を考え、それに従って色を幾重にも重ねて行く方法をとっていた。

荒井の模写の姿勢と、僧侶三人の写経の姿勢はほぼ同じ言葉で描かれている。以前から荒井画伯の模写の姿は井上靖に強い印象を残していた。井上は「写経」に没頭している僧侶を書く時、荒井画伯のことを思い出し、彼をモデルとして、創作したのではないだろうか。

荒井画伯の「模写」の姿は、三人の僧侶に似ているだけではない。荒井画伯の運命は、業行の運命と似ているところがあるのである。業行は写した経巻類を日本へ運ぶ途中で遭難し、亡くなった。一方、荒井寛方は、壁画がほぼ完成していた頃、自邸を出て、模写の仕事場である法隆寺に向かう途中、車内で脳溢血で倒れた。

彼らは二人とも、仕事を完成させ、目的地へ行く時亡くなったのである。この後、法隆寺の金堂で火災が起こり、荒井の壁画模写の半分は焼けてしまった。この点では、業行の経巻類が海難により海に巻き込まれてしまったことに似ているだろう。

「法隆寺ノート」では、「形あるものは滅びますよ」という言葉が強い印象を与えたと井上靖は語る。しかし、井上はまた、その形あるものが滅びた後に、再び人の力によって、新しく形あるものに作り出される姿を見て、「私は異様な感動に心を揺さぶる」と言う。井上は小説を通して、形あるものが滅び行くことを表現している。「僧行賀の涙」において行賀は最後に経巻類を日本にもたらずが、「形」ある経文以外は何も残らなかった。『天平の甕』の業行は一生を写経に没頭し、経文という「形あるもの」に執念を燃やす。業行の生涯は結局、経典とともに「滅び」たのである。一人普照だけが、行賀、業行より視野の広い、異国文化を把握し、「文化移入」することのできる僧侶像として描かれているのである。

五、おわりに

本稿では、井上靖の「僧行賀の涙」、『天平の甕』における、行賀、業行、普照三人の僧侶像を比較した。

まず、作者の創作メモ、中村詳一訳の『唐大和上東征伝』、両作品における三人の「写経の姿」を整理した。先行研究を踏まえな

がら、史料上の行賀の像を明らかにした。次に、行賀を中心に、虚構の僧侶業行、実在の僧侶普照との比較を行った。最後に、写経に没頭する僧侶の原型を提出し、荒井寛方との類似点を考察し、写経に没頭する僧侶像は、荒井寛方をモデルとして創作した可能性が高いと論じた。しかし、「形あるものは滅びますよ」という言葉と、作品本文との関連についてまだ十分に考察できなかった。今後の研究課題として、引き続き論じたい。

「僧行賀の涙」の引用は総て『井上靖全集』第四卷（平成七年八月、新潮社）による。『天平の薨』の引用は総て『井上靖全集』第一二卷（平成八年四月、新潮社）による。また、引用箇所（後略）、傍線及び（太字）等は、論者による。

【附録1】

ここでは神奈川近代文学館所蔵「井上靖文庫」に残された創作メモを翻刻する。以下の資料本文で、改行は井上靖のメモのままである。①②③④はメモの頁数である。判読不明の文字は□で記す。太字は山田哲久「井上靖「僧行賀の涙」論―方法としての（視点）―」（『同志社国文学』第八一号、平成二六年一月）における翻刻と異なる箇所である。■は原文のままである。

資料1

神奈川近代文学館「井上靖文庫」所蔵の「天平の薨」関連メモ（資料番号 69715-210）の一部分を以下に示す。原稿用紙はB4、縦書き（20字×20行）、400字詰（ルビ有り）、罫色は茶である。中央部分に「」を付す。「メモ」の内容は万年筆書き。

第10回

- ・ 仲麻呂
- ・ 清河
- ・ 行賀 自己完成
- ・ A / 印度へ
- ・ B / □□□

資料2

神奈川近代文学館所蔵の「井上靖文庫」には「僧行賀の涙」関連の「メモ（他筆）」（資料番号 69792-230）が所蔵されている。原稿用紙はB6、縦書き（20字×10行）、200字詰（ルビ有り）、罫色は茶である。左下に「文藝春秋 特選原稿用紙」と印刷されている。「メモ」は鉛筆書きである。

①行賀法師

行賀。姓上毛氏。和州廣瀨郡人。十五出家。二十受具足戒。二十五奉教入唐留學。學唯識

台教兩宗。在唐七年。伝来經疏五百余卷。詔付少學三十人稟其業。又教明一法師試所學。一詰問二教。稍有窒礙。一呵曰。久經歲華學植膚淺。何乖朝寄哉。賀大愧垂淚。於時朝議曰。長途一躡。何妨千里之行。大樹折枝。豈忘百畝之畝之蔭。賀著法華疏弘贊略贊。唯識議等四十余卷。延曆二十二年二月卒。歲七十五。

② 法学博士

旧 田口卯吉

新訂 黒板

第七回配本

昭和五年八月

元亨釈書 国史大系刊行会

吉川弘文館

卷第十六 日用書房

力遊九

二十九人

③ 梵釈寺永忠

釋永忠。京兆人。姓秋篠氏。寶龜之初。入唐留學。延曆之季隨使歸。涉經論。解音律。善攝威儀。齋戒無缺。桓武帝敕主梵釋

寺。弘仁七年四月滅。歲七十四。遺表上唐所得律呂旋宮圖。日月圖。各二卷。律管十二枚。塤一枚。

④ 慧濟法師 推古三十一年七月入唐留學

初同志十数人

僧旻法師 舒明四年八月 入唐

慧隱法師 舒明十一年九月

智通法師 齊明四年七月

資料3

同じく「井上靖文庫」所蔵の「天平の薨」関連の「メモ（他筆）」（資料番号 69794-230）も、「行賀」に関するメモがあるために、資料3として引用する。原稿用紙はB6、縦書き（200字×10行）、200字詰（ルビ有り）、野色は茶である。左下に「文藝春秋 特選原稿用紙」と印刷されている。

①（一三八九—一四六三）

奈良朝時代に於ける興福寺の別当。天平元年大和廣瀨郡に生る。興福寺の永厳及び元興寺の平備に学び、二十五才にして勅を奉じて入唐し、天台および法相の兩宗義を修め、在留七年（他説に三十一年）にして經疏百余卷

を携へて帰朝した。東大寺の明一が二宗の義について検問するや、その応答渋滞せるために、「久しく歳華を経て学殖なほ膚浅なり、何ぞ朝寄に乖くや」と罵られた。行賀流涙こ

②それを久うし、爾来刻苦研鑽し学解頗る深くなり、専ら筆硯を友として諸経論の疏註を書いた。延暦十年興福寺の別当となり、同二十二年二月十一日歿、年七十五。著作には、『法華弘贊』『唯識論僉議』など頗る多い。

(本朝高僧伝 谷山)

新撰大人名辞典 昭和十二年

昭和十五年 三版

③遣唐使

舒明天皇二年 — 宇多天皇

寛平六年

二十六代二百六十四年間

十九回

唐使Ⅱ西海使

犬□□

ヨツノフネ

四船

【附録2】

ここでは「僧行賀の涙」および『天平の薨』の作品本文から、行賀、普照、業行の写経の姿に関わる叙述を資料4に抜き書きする。ならびに、『天平の薨』の典拠である『唐大和上東征伝』より、普照に関する記述を資料5に抜き書きする。

資料4 写経の姿

「僧行賀の涙」の引用は総て『井上靖全集』第四卷（平成七年八月、新潮社）による。『天平の薨』の引用は総て『井上靖全集』第一二卷（平成八年四月、新潮社）による。

〔行賀〕

・行賀は年の割にひどく老けていた。背の低い上に猫背でもあり、彼は自分の姿も、表情も、自分を見る者に快い印象を与えないことを幼時から知っていた。（二八六頁）
・行賀は（天平宝字）六年から七年へかけて、長安に留まり、僧坊の一つに在って明けても暮れても写経に没頭した。（一九〇頁）
・生まれつきの猫背はさらに甚だしくなり、強度の近視は彼の躰を二つに折って、経典を嘗めるような姿勢を取らせた。（一九二頁）
・行賀は興福寺の一室に閉じこもったまま、人と会わず、帰国してから一層衰えた軀を、痾瘻のように屈めて、机に向かい続けた。（一九七頁）

〔普照〕

・これまで若手の秀才といえ、いつも普照の名が挙げられて来たが、秀才という言葉を普照は軽蔑していた。自分はただ殆ど一日机から離れないでいるだけだと思った。（二〇頁）

・普照は阿育王寺で天宝十年の春から夏へかけて、毎日のように写経の筆を執った。（七八頁）

・普照は自分がいつか業行に似て来ているのを知った。業行のために写した経巻は既に三十余巻を数えていた。（七八頁）

・二十年ぶりで第十次の遣唐使の一行は唐土へ派せられて来たのである。この頃から普照は寸陰を惜しんで写経に没頭した。（八〇頁）

〔業行〕

・自分で勉強しようと思つて何年か潰してしまつたのが失敗でした。自分が判らなかつたんです。自分が幾ら勉強しても、たいしたことはないと早く判ればよかつたんですが、それが遅かつた。經典でも経疏でも、いま日本で一番必要なのは、一字の間違ひもなく写されたものだと思うんです。（二九頁）

・普照は初めてこの人物と会つてから今日までに何回かここを訪ねていたが、いつもその机の上で写している經典の名は耳にしたことのないものが多かつた。（三四頁）

・業行の書体はいつも彼が原本としているものの字に似ていた。

（三四頁）

・もともとひどく老けて見えてはいたが、年齢はまだ五十歳を三つ四つ越したぐらいの筈であつた。それなのに体全体に老衰のような弱りが来ている感じだつた。（三七頁）

・案内されて梵寺の本堂の横手の一室にはいつて行つた普照が最初眼にしたものは、これまでいつも見て来たと同じ業行の机に對つている貧相な背後姿であつた。（五六頁）

・門のところまで送り出した普照の眼には、業行の貧弱な体が前に屈みに折れ曲つて不具者のように見えた。（五八頁）

資料5 普照に関する記述

以下は、『唐大和上東征伝』（中村詳一訳、堀朋近発行、昭和七年三月）の影印本文である。なお、引用部の（後略）、傍線部等は、論者による。漢字の字体は新字体に改めた。

第一回渡航

①遂に既済寺に於て乾糧を搜り得、大明寺に日本の僧普照を捉り得、開元寺にして玄朗玄法を得たり。（四頁）

第五回渡航

②但普照師のみ毎日食事に生米少し許りを行じ、衆僧に与へて以て中食に充つ。（二二頁）

第五回渡航 広東遊履

③普照これより大和上を辞して嶺北に向ひ明州の阿育王寺に去る。
(一七頁)

④時に大和上普照師の手を執つて悲泣して曰く、戒律を伝へんがため願を發して海を過ぐ。(一七頁)

第六回渡航

⑤十三日普照師越の余姚郡より来つて吉備副使が舟に乗る。(二三頁)

第六回渡航 入朝

⑥退心の道俗に二百余人、唯、大和上、学問僧普照、天台の僧思託のみあつて、始終六度、十二年を経過して、遂に本願を果し、来つて聖戒を伝ふ。(二五頁)

第六回渡航 唐律招提開基

⑦普照思託大和上の此の地を以て伽藍となし。(後略) (二五頁)

〈注〉

- (1) 福田宏年『井上靖の世界』(講談社、昭和四十七年九月)
- (2) 蒲生芳郎「天平の薨」(長谷川泉編『井上靖研究』昭和四十九年四月、南窓社)
- (3) 山本健吉「解説」(井上靖文庫『天平の薨』昭和三十九年三月、新潮社)
- (4) 井上靖「天平の薨」(関連 メモ) (県立神奈川近代文学館「井上靖文庫」所蔵資料番号 69715-210)
- (5) 井上靖「小説と史料」(『銀行倶楽部』講演記録、昭和四五年一月)
- (6) 山田哲久「井上靖「僧行賀の涙」論—方法としての〈視点〉—」(『同志社国文学』第八一号、平成二六年一月)

(7) 仏書刊行会編『七代寺年表』(『大日本仏教全書』大正一一年八月、仏書刊行会)

(8) 黒板勝美編「続日本紀 後篇」(『新訂増補国史大系(普及版)』巻二四、昭和五四年一月、吉川弘文館)

(9) 今泉忠義・訓読『続日本紀』巻二四(臨川書店、昭和六一年五月)

(10) 菊池寛「遣唐船物語」(『大洋』昭和五一年一月)

(11) 井上靖「菊池さんのこと」(『毎日新聞』昭和五五年三月五日)

(12) 井上靖「唐大和上東征伝」の文章」(『日本文化史』第六巻月報、昭和四〇年九月、筑摩書房)によると、井上靖が読んだのは東大寺戒壇院刊行(原刊本)に基づき、昭和二一年に高桐書院が印刷した『法務贈大僧正唐鑑真過海大師東征伝』(影印本)であったが、当時は「原文の漢文」を解読できなかった。その後、毎日新聞社の松本昭から、中村詳一が翻訳した『唐大和上東征伝』を読み、全文を正確に理解できたという。

(13) 高木伸幸「井上靖「天平の薨」考 — 「学問」と「冒険」 —」(『井上靖研究』第一五号、平成二七年七月)

(14) 小田島本有「自己本位型人間から献身型人間へ—「天平の薨」における普照の変貌をめぐって」(『井上靖研究』第一六、平成二九年七月)

(15) 井上靖「天平の薨」の登場人物」(『アカハタ』昭和六三年五月六日)

(16) 井上靖「私の自己形成史」(『日本』昭和三五年五月号〜一月号)

(17) 井上靖「法隆寺ノート」(『文藝春秋』昭和四六年新年号〜四七年三月号)

(18) (15) に同じ。

(19) (16) に同じ。

※本稿の関係資料を提供して頂いた井上修一氏、神奈川近代文学館に深く謝意を表したい。

主指導教員(堀竜一教授)、副指導教員(鈴木恵教授・角谷聰准教授)